

『方丈記』成立過程考

— 大福光寺本の内部徴憑を中心に —

森 下 要 治

はじめに

『方丈記』に広略両系統の本文の存することは既に常識となつてゐるし、両本の性格づけも先学によって多数試みられており、それぞれに示唆深い。しかしながら、両系統の關係となると、未だ定説を見ない。今、広略両本の關係について、世に行われている諸説を整理すれば、

(一) 広本が鴨長明真作であり、略本は後人の偽作であるとするもの、

(二) 広略両本ともに鴨長明真作であり、略本が広本に先行する草稿本であるとするもの、

と二説に大別できる。^序こうした性質の問題については新資料の発見でもない限り、明快な解答は得られないのであろうが、私は略本が広本より先に成立したか、それとも後人による偽作かで、『方丈記』の読みとりが大きく異なつてくると考へている。従つ

て、広本の精確な読みとりのためにも、広略両本の關係の解明に取り組まねばならないと思われる。

小稿は、この『方丈記』の広略両本の關係に検討を加えんとするものである。そして、その方法として、諸本中最も信頼すべき本文である広本系古本の大福光寺本の内部徴憑に依拠しつつ論を進めようと思つ。

—

「記」と呼ばれる文学がある。その起源は中国に求められるが、日本においてもそれに倣つて書かれた「記」の文学が『本朝文粹』等に見られる。『方丈記』も、こうした「記」の文学の系列の延長線上に位置づけることができる。^序

一体、「記」の文学作品は、そのモチーフ・テーマ・構成等に似通つた点が多々看取される。換言すれば、「記」の文学は、

ある一定の型を受け継ぎながら書かれてきたということになるだろう。

従来、「方丈記」は読み手によって自由に読まれ、その中で「方丈記」の構成についても恣意的に論じられることが多かった。だが、以上の前提に立ちつつ、「方丈記」の構成を捉えなおせば、「記」の作品の系列を遡及することで、その構成についても一定の型が見出せるはずである。

そこでまず、「方丈記」への影響が顕著な「記」の文学を取りあげ、その構成を整理しようと思う。

二

「記」の系列の中で「方丈記」への影響を考える時、まず白楽天の作品に言及しなければならない。楽天の「池上篇」并序と「草堂記」とは、「方丈記」の執筆に少なからぬ点で範となつたと考えられる慶滋保胤「池亭記」に、著しい影響を及ぼしたといわれる。はじめに、この二作品の構成を整理する。

○白楽天「池上篇」并序

I、住居の位置とその造作、調度などの様に関する叙述（「都城風土水木勝々方長平滑可_二以坐臥_一」）。

II、その地に棲むに至つた経緯の略述（「太和三年夏_一今率為_一池中物_一矣」）。

III、意に合った住居での、自由気侖な生活についての叙述（「毎

池風春池月秋_一命為_二池上篇_一云_二爾_一」以上IからIII、序）。

IV、意に合った住居への満足感と人生を終えようとする心境の叙述（「十畝之宅五畝之園_一吾將_レ終_レ老乎其間_一」、本篇）。

○白楽天「草堂記」

I、匡廬の見事な景と、それに心打たれて構えた草堂の有様の叙述（「匡廬奇秀甲_二天下_一山_一儻道佛書各_三兩卷_二」）。

II、草堂を圍繞する自然の景観と、その草堂での気侖な生活の叙述（「楽天即来為主_一故云甲_一廬山者_一」）。

III、一般の住居や、自分の以前の住居と比較して、この草堂がいかに素晴らしく、自分の生活を安楽にしているかを叙述（「噫凡人豊_二一屋_一_一因_レ為_二草堂記_一」）。

次に、以上の白楽天の「池上篇并序」「草堂記」の影響を受けて書かれたと言われる慶滋保胤「池亭記」の構成を整理する。

○慶滋保胤「池亭記」序

I、西の京の衰退の様の叙述（「予二十余年以来_一天_一之亡_一西京_一。非_二人之罪_一明也_一」）。

II、都の住みにくさと、人々の郊外への移住による都の衰亡_一についての叙述（「東京四条以北_一是天_一之令_レ然_レ歟。将_レ人之自狂_一歟_一」）。

III、「池亭」の位置とその有様についての叙述（「予本無_二居处_一冬有南簷之目_一。可_二以_レ炙背_一」）。

IV、外界から遮断された「池亭」での、仏道に帰依し、書物を愛する生活についての叙述（「予行年漸垂五旬、我愛吾宅」と不知其佗」）。

V、理想的住居論の展開（「応和以来、子孫相承。可レ不悛乎」）。

VI、署名（「天元五載。孟冬十月。家主保胤。自作自書」）。

三

以上を承けて、次に「方丈記」の構成を示すが、本文は略本については延徳本、広本については大福光寺本をとりあげる。

○略本「方丈記」（延徳本）

I、この世の住居と人間とのほかない関係についての叙述（「行く川の流は絶ずして、うれへならぬ時は稀なり」）。

II、辛い別れと人間の欲望とによって、不安なものになっている現世での生活の叙述（「若き子をさきだて、二のまなこ閉づるを待つばかり也」）。

III、草庵のつくりについての叙述（「爰にわれ、深き谷のほとり閑なる林の間に、誰をか宿し、何ものをか置かむ」）。

IV、狭いながらも気候で自由な草庵の生活について詳述（「沢の根芹、峰の木の実、信教の恩あらんことを持つばかり也」）。

V、知足の生活の中での、死を迎えるばかりの心境を露呈（「方丈のすまひ楽しきこと、六道四生の群生を導かむこと、いく

ばくの楽みぞや」）。

VI、和歌（「墨ぞめのころもにたる心かたとふ人あらばいか、こたへむ」）。

VII、署名（「桑門蓮胤 誌之」）。

○広本「方丈記」（大福光寺本）

I、この世の住居と人間とのほかない関係についての叙述（「ユク河ノナカレハタエスシテ、キエストイヘトモタヲマツ事ナシ」）。

II、作者自身が見聞した天変地異に関する叙述（「予モノ、心ヲシレリシヨリ、事ハニカケテイヒイツル人タニナシ」）。

III、人間関係の苦しみ、そして人間関係から生ずる欲や「ウラミ」についての叙述（「スヘテ世中ノアリニク、タマユラモコ、ロヲヤスムヘキ」）。

IV、隠棲までの経緯の叙述（「ワカ、ミ父カタノ、又五カヘリノ春秋ヲナン経ニケル」）。

V、「方丈」の庵についての叙述（「コ、ニ六ソチノ露キエカタニヲヨヒテ、カリノイホリノアリアウカクノ事シ」）。

VI、「方丈」の庵での生活の讚美（「ソノ所ノサマヲ、スマスシテ誰カサトラム」）。

VII、隠棲における矛盾の告白（「抑一期ノ月カケカタフキテ、不請阿弥陀仏面三遍申テヤミヌ」）。

VIII、署名（「于時建曆ニフタトセヤヨヒノツコモリコロ桑門ノ蓮胤トヤマノイホリニシテコレヲシルス」）。

四

取りあげた五作品の構成を叙述内容により整理すれば、表一(1)のようになる。

「方丈記」が、先行する「記」の文学の叙述内容を受容し(ロ)・(二)・(ト)、膨らませている(イ)・(ハ)・(リ)・(ヌ)ことが看取される。

分段の前段階として、少なくとも構成を以上のように押さえることだけは可能なのではなからうか。私には、以上のように「方丈記」の構成を把握することが、著しく客観性を欠いたものであるとは思われない。

従ってこの検証から、「方丈記」を、その叙述内容より、略本(延徳本)は七つ、広本(大福光寺本)は八つの部分に分けて考えることができると言える。

五

「方丈記」がいわゆる和漢混浴文の文章であることは、既に多くの先学の御指摘のあるところだが、そのような中で河崎正之氏・遠藤好英氏に、「方丈記」の文章を詳細に分析・考察なさった御論稿がある。今、両氏が指摘された、「方丈記」の文章に於ける漢文訓読的・和文的要素を、先に検討した大福光寺本の八つの部分毎に観ると、興味深い結果が得られる。ただし、河崎氏が

表一(1)

方丈記		池亭記	草堂記	池上篇并序	作品	叙述内容
略本 (延徳本)	略本 (大福光寺本)					
I	I				(イ)	世界観
II		I・II			(ロ)	社会観察
III	II				(ハ)	人事観察
IV				II	(二)	隠棲に至る経緯
V	III	III	I	I	(ホ)	住居の有様
VI	IV	IV	II	III	(ヘ)	閑居の讚美
	V		III	IV	(ト)	死を迎える心境の告白
		V			(チ)	住居論
VII					(リ)	隠遁生活の矛盾の告白
	VI				(ヌ)	和歌
VIII	VII	VI			(ル)	署名

検索し示された数値には若干の疑問が存し、遠藤氏が底本とされた日本古典文学大系本はその本文が本稿で用いる大福光寺本と必ずしも一致しないので、数値については「略本方丈記総索引」に依り私に調査したものを示す(表一(2))。なお各項目の詳細については、河崎氏・遠藤氏の御論稿と「総索引」とを参看された

い。
まず漢文訓読的要素についてみる。

格助詞ガ＋形式語%													
倒置法													
モシ……トキハ													
モシ……已然形ナレバ													
オヨビ													
ナカレ													
提示語を示すコレ													
ニアタハズ(○)													
ベカラズ(○)													
タトヘバ……ゴトシ(○)													
タトヒ……トモ(○)													
イハク(○)													
イハユル(○)													
50.0	2												
36.4	1						1		2				
33.3				2				1	1	1			
0													
60.0					1		5						1
11.1		2	5						2		1		
0						1						1	
0													
29.4	3	2	7	1	1	7	1	5	1	1	1	1	1

けるその使用状況を調査する。すなわち、大福光寺本のⅠからⅧの各部分の全文数に占める、対偶句をなしている文(対偶句を含むか、対偶句の一部になっている文)の割合を算出するのである。

次にその結果を示すが、文の認定にあたっては、「方丈記解釈大成」の本文に従った。

母集団となる文の数は、

Ⅰ……16文 Ⅱ……117文 Ⅲ……16文
 Ⅳ……16文 Ⅴ……19文 Ⅵ……101文
 Ⅶ……16文 Ⅷ……1文 計 299文
 である。

Ⅰ……八七・五% (14文)
 Ⅱ……二八・二% (33文)
 Ⅲ……九三・八% (15文)
 Ⅳ……五〇・〇% (8文)
 Ⅴ……一五・八% (3文)
 Ⅵ……五五・四% (56文)
 Ⅶ……五三・八% (7文) Ⅷ……〇%
 大福光寺本全文……四五・五% (136文)

※括弧内は、対偶句をなしている文の実数を示す。

この数値を見て、第一に言わねばならないのは、対偶句をなしている文の割合が九〇パーセント前後の高率を示している部分(Ⅰ・Ⅲ、五〇パーセント強の部分(Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ)、五〇パーセント未満の部分(Ⅱ・Ⅴ)、〇パーセントの部分(Ⅷ))という四

つの相が認められることである。しかしながら、ここは母集団が少ないこともあるので、あまり強調し過ぎてはならない部分であろう。第二に触れるべきことは、対偶句の使用が、それによって表出される内容とも深くかかわっているということである。この点については、後に言及する。

七

このように三つの観点から大福光寺本の本文を検討すれば、先に叙述内容によって分けた八つの構成部分に次のような文章表現上の傾向を見出すことが可能かと思われる。

- (一) 漢文訓読的調子が強く、和文的表現があまり見られず、対偶句をなす文の割合が五〇パーセント以上となるもの(Ⅰ・Ⅲ・Ⅵ)。
- (二) 漢文訓読的調子が弱く、和文的表現があまり見られず、対偶句をなす文の割合が五〇パーセント以上のもの(Ⅳ・Ⅶ)。
- (三) 漢文訓読的調子が強く、和文的表現がよく見られ、対偶句をなす文の割合が五〇パーセントを下回るもの(Ⅱ)。
- (四) 漢文訓読的調子は強いても弱いとも言えず、和文的表現はあまり見られず、対偶句をなす文の割合が五〇パーセントを下回るもの(Ⅴ)。
- (五) その他(Ⅷ)、ここは先述した通り、一文のみであるので、速断は避ける。

表一(1)で示したように、略本(延徳本)の主要な構成部分は、ほぼ広本(大福光寺本)に包含されてしまう。そしてこのうち、叙述内容(イ)・(ハ)については、細かな詞句の異同や記事の多寡はあるものの、広略両本に似通った記述がなされているのである。この叙述内容(イ)・(ハ)・(ハ)は、大福光寺本でいえばそれぞれⅠ・Ⅲ・Ⅵの部分にあたり、これは前節で検討した傾向の(一)を示すものと合致する。先の(一)のうち、対偶句に再度着目すれば、この三つの部分が、大福光寺本のⅠからⅦ(Ⅷは前節で述べた理由により触れずにおく)のうちで、最も対偶句の頻度の高いものとなっている。少し乱暴かも知れないが、他人をして読ませることを作者が意識した結果ではなからうかと私には思われる。

今仮にこのⅠ・Ⅲ・Ⅵをひと続きの文章と考えれば、その文章は、まず作者の無常感が披瀝された後(丁)、人間社会でのくらしみや憂いが詳述され(Ⅲ)、これを承けて、前と対比的に「閑居ノ気味」を謳いあげた(Ⅵ)ものとなり、単純ではあるが、一応一貫した構成が看取されることになる。作者にとって無常感の披瀝とは、いわば世界観の披瀝であるのだから、その叙述には当然肩に力の入るところであろう。また、ここでの「閑居ノ気味」は、主題とも言えるものであり、無常感の叙述と同等もしくはそれ以上に主張すべき箇所である。対偶句という表現法がこうした作者の主張を担っていることを考慮に入れば、作者の強い文芸的創作意識が働いているかわからう。

Ⅵ(叙述内容(ハ)の、

夫、人ノトモアルモノハ、トメルヲタウトミ、ネムコロナルヲサキトス。必スシモ、ナサケアルト、スナホナルトヲハ不愛。只、絲竹・花月ヲトモセンニハシカシ。人ノヤツコタル物ハ、賞罰ハナハタシク、恩顧アツキヲサキトス。更ニ、ハク、ミアハレムト、ヤスクシツカナルトヲハネカハス。只、ワカ身ヲ奴婢トスルニハシカス

の部分や、

今、サヒシキスマヒ、ヒトマノイホリ、ミツカラコレヲ愛ス。ヨノツカラミヤコニイテ、身ノ乞匄トナレル事ヲハツトイヘトモ、カヘリテ、コ、ニナル時ハ、他ノ俗塵ニハスル事ヲアハレム。若、人コノイヘル事ヲウタカハ、魚ト鳥トノアリサマヲ見ヨ。魚ハ水ニアラス。イヲニアラサレハ、ソノ心ヲシラス。トリハ林ヲネカフ。鳥ニアラサレハ、其ノ心ヲシラス。閑居ノ気味モ、又、ヨナシ。スマスシテ、誰カサトラム

の箇所には、抽象的な思考を対偶表現を連ねることで論理的に記述し、更に、読む者を説得し反論を許さない語勢が感じられる。それはとりもなおさず、作者の強い訴えかけの意識の反映とみることができ。

一方、五大災厄が語られるⅡ(叙述内容(ロ))に眼を転ずれば、低い割合ながら対偶句は見られるが、例えば、

トヨキ家ハ煙ニムセヒ、チカキアタリハヒタスヲ始ヲ、地ニフキツケタリ。ソラニハ、ハキヲフキタテラレハ、日ノヒカ

リニエイシテ、アマネククレナキナル中ニ、風ニタエス、フキ、ラレタルホノホ、飛カ如クシテ、一二町ヲコエツ、ウツリユク。其中ノ人、ウツシ心アラムヤ。或ハ、煙ニムセヒテ、タウレフシ、或ハ、ホノヲニマクレテ、タチマチニ死ヌるように、先の二つの引用のような訴えや主張といったものは感じられない。そのかわり、冷徹な観察によると思われる写實的叙述の確かさと細かさがあり、その正確さを支えているのが対偶表現であると考えられる。

対偶というひとつの表現法でありながら、それが生み出す効果の違いは、必然、それを意図した作者の執筆意識の違いに帰着せざるを得ないであろう。

小稿の冒頭で、「方丈記」の広略両本の関係についての諸説を整理して掲げたが、仮に略本が後人の偽作であるとすれば、その偽作の張本人は、広本のうち文章表現上同一傾向を示すⅠ・Ⅲ・Ⅵの部分を選び出して略本を創り上げたことになる。それはひいては、作者長明の執筆意識の違いをも見抜いたという可能性に繋がっていくことになるのである。しかしながら、果たしてそのようなことが可能であろうか。私には、これがあまり現実的な考え方であるとは思われない。

結論から言えば、私は、大福光寺本に代表されるような広本が執筆された時、草稿本として、現存する略本に近い構成と内容を持つた本文が既に存在していたと考えている。

大福光寺本の文章表現上の特徴の、部分毎の異なりは、執筆時

期の違いによるものではなからうか。執筆意識が、文章表現を支える重要な要素であることはまず疑いなく、**「方丈記」**のような小品が前から順に一気に書きあげられたとするならば、その執筆期間に作者の執筆意識が転々とするということは考え難いからである。まして「記」の文学のように一貫した論理構成を備えたものに関しては、なおさらである。従って大福光寺本は、最低でも、Ⅰ・Ⅲ・Ⅵ、Ⅳ・Ⅶ、Ⅱ、Ⅴの四度にわたる執筆の末の本文であると思われる。

ただし、このように考える時、注意を要するのはⅤの部分の扱いである。この、大福光寺本のⅤは、叙述内容(ホ)の住居の有様について述べる部分であるが、表(1)に掲げた先行作品と比較してもわかるように、この種の文学作品においては不可欠の記事であったと思われる。とすれば、草稿本が「記」の文学としての体裁を整えるためには、叙述内容(イ)(ホ)(ハ)、大福光寺本で言えばⅠ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵにあたる部分をその構成要素として備えていたと考えなければならぬ(これは広略両本に共通する叙述内容の部分である)。しかし、Ⅰ・Ⅲ・ⅥとⅤとは、文章表現の傾向が異なっている。私のここまでの推論では、この四つの部分は、文章表現に同じような傾向を見せるべきところである。

細谷直樹氏は、広本と略本とで庵室の内装の叙述が異なることに目をつけられ、これを「日野山中での庵室の模様が見え」のため、と考えられた。私は、内装の叙述の広略両本の差を、細谷氏のように考えるだけの確証を未だ得ずにいるが、広本の記述からして草庵の転居があったことだけは確かであり、模様がえもし

くは転居により内装が変化したためであることは動かないだろう。従って、大福光寺本Vは、一度は全面的な書きかえが施されたものである、と言える。VがI・III・VIと違う傾向を示すのは、全面的改訂を経た後の本文であるためであろう。

また、Vで全面的な改訂が行われているとすれば、細かな推敲も当然行われたはずであり、略本と広本との間で微妙な詞句の差が存するのも、ひとつにはこのためではないか。

要するに、略本に近い構成と内容とを持っていたと推定される草稿本に、細かな推敲と大胆な加筆とが行われて、今ある広本の形に整えられたのではなからうか。そして、広本「方丈記」の原形になったという意味で、この草稿本を「原方丈記」と呼ぶ。

九

山田孝雄氏は広本「方丈記」の文章を評して、

一夕、今を思ひ昔を顧みて、感慨に堪へざるあまり筆を呵して、一気に草し了りたるものなるべく、その文章に生氣ありて人を動かす力に富めるも亦、これが、釘鉿補綴の餘に出でしものにあらずして、一氣呵成の文たるが故なるべし。

と述べられたが、以上のように考えてくると、広本が「一氣呵成」に書きあげられたとは考えにくいことが、大福光寺本の表現より明らかになったと思われる。

広本は幾段階かの推敲を経た後の本文であると考えられ、その意味では、小稿の冒頭で示した二説のうち、略本草稿広本定稿説

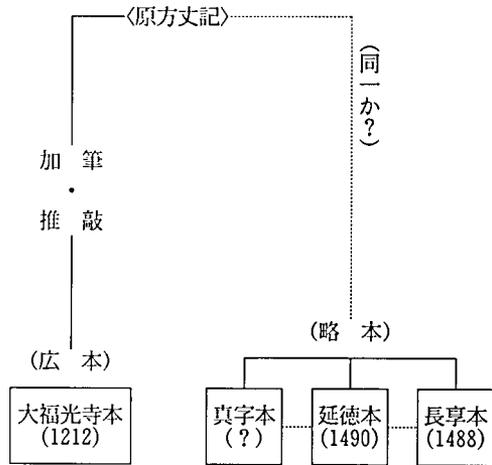
に私の立場は近い。

ただ、現存する略本をそのまま広本の草稿本と考えることに、いささかの不安が残る。

何といつても略本で奥書を有するものうち、最古のもので長享二年（一四八八）であり、広本の最古本大福光寺本の識語「建曆ノフタトセ」（二二二二）からは二七六年も下るのである。

私の立場としては、広本成立に際して「原方丈記」と呼ぶべき草稿本があり、その構成が略本に近かったということが確定できない限り、略本Ⅱ草稿本とするのはやや短絡に過ぎると思われる。先学による論証も、略本から広本への流れに重きが置かれているようであるが、略本が本当に草稿本と同一のものであるかどうか明らかになければ、根無し草の感をまぬかれないのではないか。またその際、略本諸本の関係についても、あわせて考えられなければならない。

これらのことをふまえれば、略本と広本との間に、「原方丈記」を介して、次のような関係が推定できる。



おわりに

小稿では、大福光寺本の構成と表現という内部徴憑を中心に「方丈記」の成立過程を検討し、広本の草稿本として、「原方丈記」の存在の可能性を仮説の形で提示した。

最初にも述べたが、この問題は「方丈記」の読みとりとも深くかかわるものであり、何度論じても論じ過ぎということはないは

ずである。決して検討の手を緩めてはならない。小稿も、こうした認識に立っての一つの試みである。

注1、この他に略本真作広本偽作説が行われたことがあるが、山田孝雄氏に論破されて以来、ほとんど顧みられていない。

2、近藤春雄氏「中国字芸大事典」（大修館書店、昭和五十三年初版）に依れば、「記」とは、

文体の名。客観的に事を書きしるした文。事実をそのまま書いた文。正字通に「記は誌なり。事を紀するの辞なり」とあり、その体は叙事を主として議論をまじえたものを変体としている。

とされている。小稿で言う「記」の文学も、おおむねこれに従っている。注7遠藤氏のように、「方丈記」の主観性抒情性の濃さからこれを「記」とすべきでないとする御意見もあるが、小稿第四節で示すように、「方丈記」が先行する「記」の文学を受容するところは大きいと考えられる。

3、白樂天の二作品の引用本文は「白氏長慶集」（芸文印書館、中華民国七十年）に依る。返点は私に付した。

4、日本古典文学大系「懐風藻 文華秀麗集 本朝文粹」（小島憲之氏校注 岩波書店、昭和三十九年）に依る。

5、新日本古典文学大系「方丈記 徒然草」（佐竹昭広・久保田淳両氏校注 岩波書店、平成元年）の付録に依る。

6、復刻日本古典文学館「大福光寺本方丈記」（日本古典文学会、昭和四十六年）に依る。以下、大福光寺本の引用はこれ

に依るが、中に句読点を付したものは、注12「方丈記解釈大成」に従っている。

7、河崎正之氏「方丈記と漢文訓読的表現」(福井大学「国語国文学」第六号、昭和三十一年十一月)、遠藤好英氏「方丈記」の文章―その史的位置と独自性への視点―

「(『日本文学ノート』第二十二号、昭和六十二年一月)。

8、青木伶子氏 武蔵野書院、昭和四十年。

9、築島裕氏 東京大学出版会、昭和三十八年。

10、石垣謙二氏「語法より観たる今昔物語―「が」「の」の用法二三について―」(『国語と国文学』第十八卷10号、昭和十六年十月)に示されたもので、河崎氏前掲論文に「漢文訓読調の文章と和文との差は、全方助詞に対する「ガ」形式語」の割合にある」と紹介されている。

11、国語学会編「国語学大辞典」(東京堂出版、昭和五十五年初版)、「対句」(市川孝氏執筆)の項。

12、篠瀬一雄氏 大修館書店、昭和四十一年。

13、永積安明氏は「文体における中世の成立―『平家物語』と『方丈記』をめぐって―」(『文学』第二十六卷10号、昭和三十三年十月)において、

たみかけてゆく文章の、ほとんど論証的な明晰性は、長明の創造主体の対象化に対応しつつ、漢語の抽象性をも生かしながら、主として漢文訓読体の持ちうる分析的な特徴を、十分に生かしたものだといふほかあるまい。

と述べておられる。

14、細谷直樹氏「広本方丈記と略本方丈記」(『国語と国文学』第四十一卷12号、昭和三十九年十二月)。

15、岩波書店「方丈記」(山田孝雄氏校訂 岩波書店、昭和三年)の解説。

付記

小稿は、昭和六十三年卒業論文として本学教育学部に提出したのから一章を抄出して、これに加筆し修整したものです。稿を成すにあたり、位藤邦生先生より懇切な御指導を賜りました。深く感謝いたします。

末筆で恐縮ですが、若輩の私が本誌の記念すべき号に発表の機会を得たのは、浮橋康彦先生をはじめ、教育学部国語科の先生方の御配慮によるものです。ここに記して、お礼申しあげます。

―本学文学研究科博士課程前期在学―